

## 《資料紹介》

# 県立博物館の織物 I

## — 手 縞 —

大 城 志津子<sup>★</sup>

与那嶺 一 孝<sup>★★</sup>

沖縄の自然や美しさや工芸文化を讃美した言葉は多い。「織物王国」は、その一つで沖縄の織物文化の素晴らしさを言い当てている。実際に素材・染色・織りの技法は多種多様であり、他府県には類がない。このように多彩な織物だが、古い資料の公開と調査報告が少なく、研究を進めていく上でのネックとなっている。昭和59年から行っている当館所蔵の織物調査は、沖縄の織物の素材・染色・技法のデーターを収集したもので、今回は手縞についてまとめ、ここに報告する。

手縞は、格子柄の中に絣を施したものといい、首里の織物の一つとして知られている。絣と、色・柄どちらも大胆な格子の二つの違った要素が、互いに作用し美しく仕上がっていいるところから、織物技術の粋を集めたと評されることもある。尚姓家譜によると道光25年（1845年）の記述に『手嶋白糸羅織布一反』が確認されるが、今日あるような技法が、いつ頃から始まったのかは定かでない。

首里の織物はそのほとんどが上流階級の衣裳で、里之子筋目の親雲上夫人及び筑登之筋目の礼装であったと言われる。なかでも若年者、新参者が着たようで、紋織類に比べると、一級品としては扱われていない。ただ、礼装だったところから、絣を使った平織の内では格が高い方だったと考えられる。鎌倉芳太郎著の『琉球文化の遺宝』の「図版502・王子着用紬（久米島）綾の中飛切（絣）」と「図版509・王宮婦人着用夏单衣芭蕉布白地紅（紅花）縞」は明らかに手縞である。また、大城の調査で、西ドイツ、ポンにある民族博物館には、明治初期（廃藩置県前）の沖縄の衣裳が階級別に揃っていることを確認しており、その当時の購入品の『物品目録及清算書』によると「男女及ヒ等級ヲ示ス處ノ衣服類」の王子按司女ノ部、親方女ノ部、平民女ノ部のそれぞれの項に「手縞袴」の記録がみられ、王家や上流士族の衣裳でもあったこと、さらに、明治17年当時には、既に一般庶民にも着用が許されていたことが分かる。

素材や柄の大きさにもよるが、この記録をみると「王子按司、親方階級の着た手縞は金八円」「平民の妻女の手縞は金三円六拾銭」となっている。「平民の女子の芭蕉布が金壱円

(★おおしろ しげこ 琉球大学教授)

(★★よなみね いちこ 県立博物館学芸員)

六拾銭」「米壹合が金八厘」「唐芋貳斤が金四厘」の時代である。

当館所蔵の手縞は、昭和61年3月現在、15点である。調査は昭和59年7月、織の技法・素材・織の密度・図柄・形態及び寸法の項目に分けて行った。以下に述べることは調査の概要とまとめである。

織物は製作年代を推定するのが難しい資料だが、ここに紹介するほとんどは、素材や仕立て方などからみて、廃藩置県後、新しい日本文化がかなり入ってきた頃に織られたものではないかと推察される。

## 1 素 材

使われている素材はほとんど絹綿・緯木綿で、本調査の手縞15点のうち、絹綿はわずかに3点である。絹緯手紡ぎの絹が使われているものも2点あり、灰色や焦茶の地色からみて久米島の貢納布ではないかと考えられる。

沖縄での養蚕について『球陽』には、「1619年越前の人で宗味普基が久米島民に、その技術を教習したが、伝承では堂之大親という人が中国より伝えたといわれているので、宗味は再び詳しい技術を教授したのであろう」とある。17世紀以前か以後かの問題点が残るが、いずれにしても久米島から始まったとされている。

木綿は、1621年儀間真常が薩摩から種を持って来て伝えたと『球陽』や『琉球国由来記』にあるが、木綿が常用されるのは近年に到ってからである。先の『物品目録及清算書』には「木綿経・金四拾銭」「芭蕉経・金六拾銭」「紬経・金貳円」とあり、この頃には、木綿の価額が安くなり、手に入りにくい糸ではなく、平常着に使われていたことが察せられる。

## 2 織の密度

密度は、1cm間にある経糸、緯糸の本数を調べ、そこから何ヨミの簇を使ったか割り出した。当館所蔵品には、現在の簇で11ヨミから20ヨミまでの簇が使われている。現在の沖縄の織物で使用される簇は13~14ヨミで、一番細い糸を使う宮古上布で15~16ヨミである。20ヨミの簇が使えたということは当時の糸が良質で細かったことを意味する。

## 3 染 色

沖縄は気候風土の恵みもあり、染められた色が日の光に負けず鮮やかで美しい。所蔵品に使われている色は、おもに紺などの藍色系、黄、赤、緑、茶などで、染めは、琉球藍やフクギ・ヤマモモ・テカチなどの植物染料を基調としている。赤や緑はフクギなどの黄色を下染めに、蘇枋や藍を加えている。化学染料を使ったものもあるが、時代的に新しいものである。久米島紬の灰色はユウナ染めで、焦茶はグールを下染めに、鉄分を含んだ泥で媒染を行ったものである。琉球藍はキツネノマゴ科の多年草で現在は沖縄本島北部が産地である。王家から庶民まで幅広く利用されている。テカチも藍と同様によく使われた染料で、シャリンバイのことである。フクギもまた沖縄織物ではよく染められている。グール

はサルトリイバラのことで久米島紬の染色に使われる。

#### 4 図 柄

絣は14~15世紀に沖縄に導入されたと言われているが、いつ頃から現在のような沖縄独特の形に変化したのかは明確でない。沖縄の絣の特徴は、簡潔に自然や生活具を表していることと、機の上でずらしながら模様をつくる手結い方式によるものである。絣には強弱関係があり、布には奥行きが感じられる。特に首里で織られた絣は首里綾として、評価も高い。手縞に使われている絣は、ほとんど二種類で、手結い式の緯絣である。ヌチヒチサギー（横引き下げ）、マユビチクワカキー（眉引と小柄模様）、チミノカター（爪の型）、ミジ・グム（水雲）、トウイグワー（鳥）などがみられる。

格子には紅白あるいは紺白の杢糸（ムーディ）が織り込まれており、かつては紅白のムーディをお祝いに、紺白のムーディの場合は法事に着用したと伝えられている。縞は、例えば赤縞・白縞・地・黄縞といったように奇数で構成されている。お祝用としての衣裳が多いので、使用された杼の数が縞、絣、地糸を含めると五杼（イチヒヂチ）、七杼（ナナヒヂチ）といった縁起をかついだ奇数で構成されているものが多い。絣が一種類の場合は五杼（イチヒヂチ）であり、二種類の場合は、七杼が圧倒的に多く、その他八杼や六杼などの例外もある。また太い縞の間には必ず細い縞が織り込まれており、そこにできる十字の部分に絣が施されている。太い縞も絣同様にほとんど二種類で、経も緯も同じ柄である。

以上のことから太い縞二種、細い縞一種で、十字の中にできる絣が二種という柄のパターンがあることが分かり、絣は一つの寸法で括ったもので二種類の表現をしたものと、同じ柄を市松に織るという、仕事上、合理的に使われている。もちろん、それに当てはまらないものもある。

#### 5 形 態

沖縄の着物の形態は和装と大部異なっている。打ち掛けは締めずに着用したが身丈は裾を引かず、くるぶしを覆う長さである。衿は返衿で和装のものより長い。また衽下りは和装より短い。脇には三角形のワチスピ（襷）がある。和装の資料はNo. 2 の子供着、No. 4 の着物のみで、胴衣を除きすべて打ち掛けである。

古い衣裳の仕立て方をみてみると縫いしろの後始末がほとんどされていないこと、裾の始末を行ってから脇が縫われていること、縫い目が荒いこと、長方形の布を三角に切ったものが左右の衽にわれていることなどに気付く。縫いしろの後始末がなされていないのはほとんど布を断ち切らず、織り幅いっぱいまで使っているからである。当館資料はこういった古い琉装の縫い方と和装の縫法が混合になっているものと、形態は琉装だが和装の縫い方のものがあり、製作された時期は和装の技術が導入されはじめた頃だったと考える。

# 1. 木綿紺地手縞上衣（大柄）

素材：絹緯木綿

密度：絹24本×緯19本

染色：地色—濃紺（藍）

- 縞——赤（フクギに蘇枋）
- 緑（フクギに藍）
- 黄（フクギ）
- 紅白のムーディ

絣——白

絣：柄名（マユビチクワカキー）

手結式の緯絣

縞：太い縞

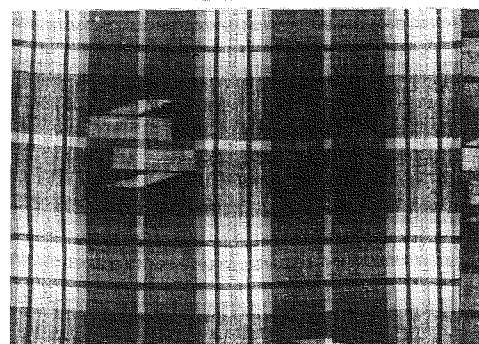
①赤・黄・地・黄・ムーディ・黄・地・

黄・赤

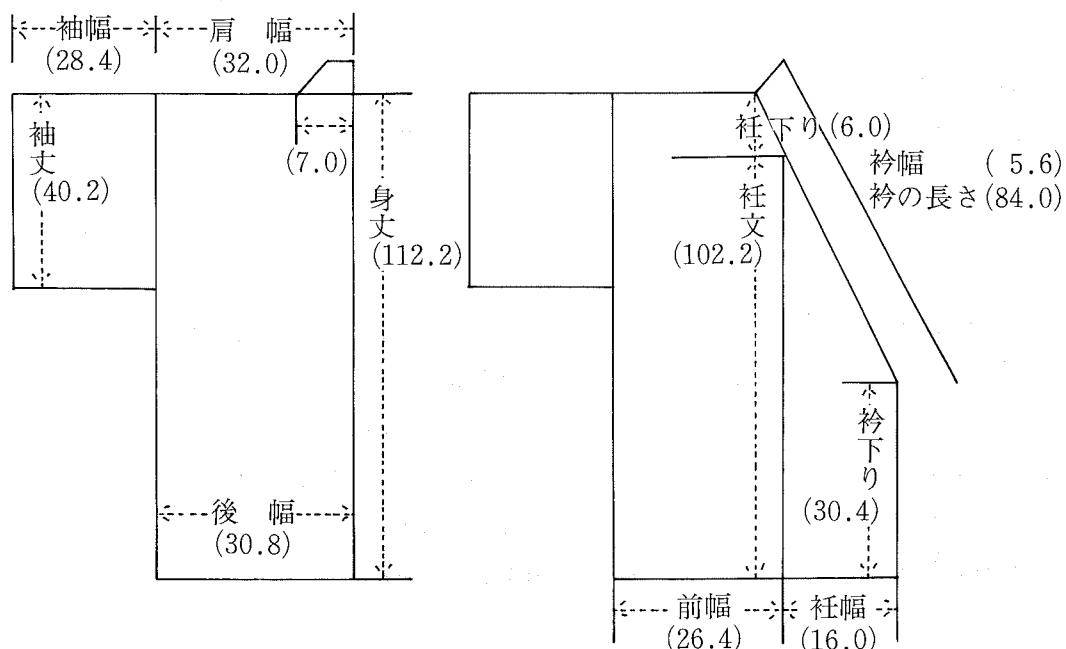
細い縞—赤

杼の数：六ヒヂチ

\*手紡ぎの木綿でざっくりと織られているが糸質が良いため布は軽い。模様は絣一種、太い縞が一種で他の手縞と異なる。二玉と大柄で簡潔な図柄だが手縞らしい。形態は丈が短く琉装の様相をなしているが、裾の始末、返し衿ではないなど和装技術による部分がある。布じたいは、良質なので、後で、仕立て直したと考えられる。明治中期頃までに、首里で織られたものであろう。単衣で身分の高い人が着用したと思われる。



## 形態及び寸法



## 2. 絹木綿浅地手縞子供着（大柄）

素材：絹綿 縞は絹緯どちらも絹

密度：絹28本×緯28本

染色：地色—絹は白

    緯は浅黄（縞）

縞—赤（フクギに蘇枋）

    水色（藍）

    紅白のムーディ

縒—濃紺（フクギに藍）

柄名：トウイグワー・ヌチヒチサギー

手結式の緯縒（二）

縞：太い縞

    ①ムーディ・水色・白・地・赤・白・赤・

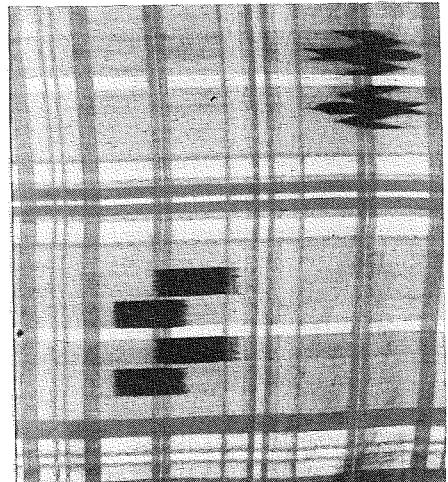
    地・白・水色・ムーデボイ

    ②赤・水色・ムーディ・白・ムーディ・水  
    色・赤

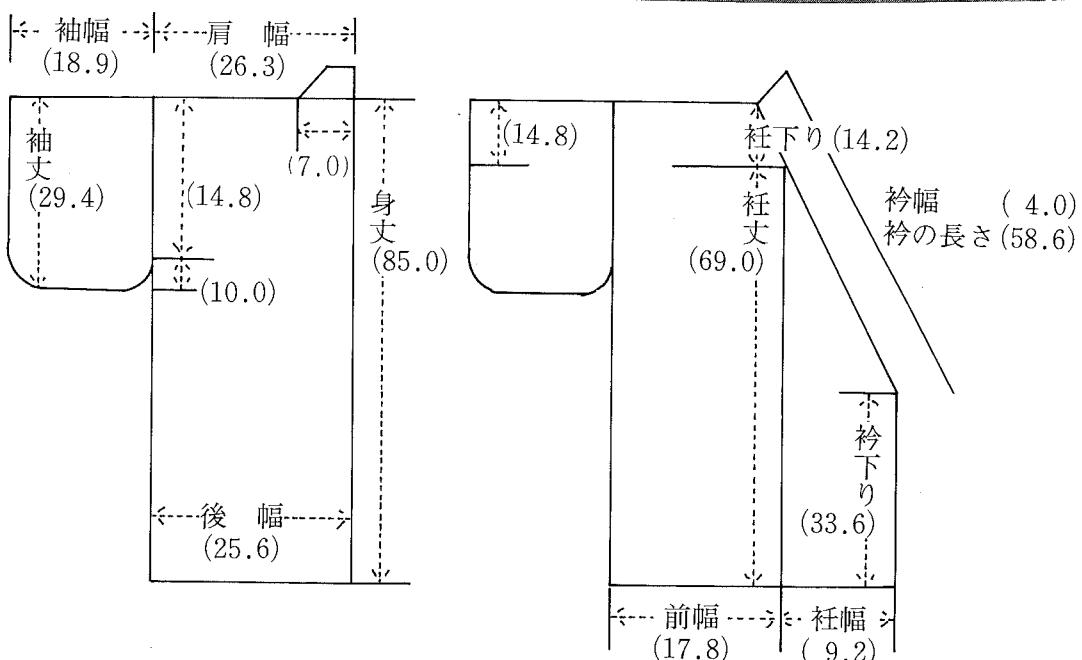
細い縞—絹赤・白・赤・緯白

杼の数：七ヒヂチ

\*地の経糸は白だが、縞の赤い色がにじみ、赤く変化している部分がある。模様は二玉と大柄で、トウイグワーの縒が使われ子供着らしい。浅地に紺縒は染め難い色使いであるが涼しい印象を与えており。裏は赤い別布で、仕立て方、形態は和装である。図柄から首里で織られたと考えるが製作年代は明治後期から大正あたりであろう。



### 形態及び寸法



### 3. 絹木綿紺地手縞衿上衣（中柄）

素材：緯木綿 縞は経緯どちらも絹

密度：経40本×緯22本

染色：地色 経は臘脂（蘇枋に藍）

緯は紺（藍）

縞 赤（フクギに蘇枋）

緑（フクギに藍）

黄（フクギ）

紅白のムーディ

絢 白

縒 柄名（カギジャー・マユビチクワカキー）

手結式の緯縒（二）

縞 太い縞

①白・赤・ムーデボイ・緑・赤・白

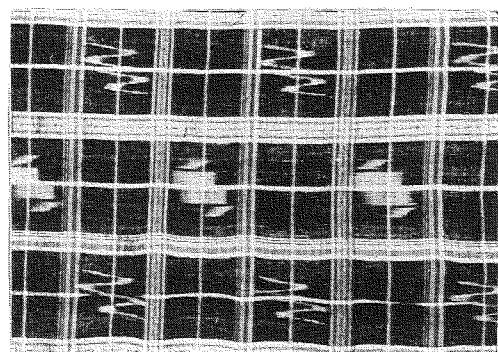
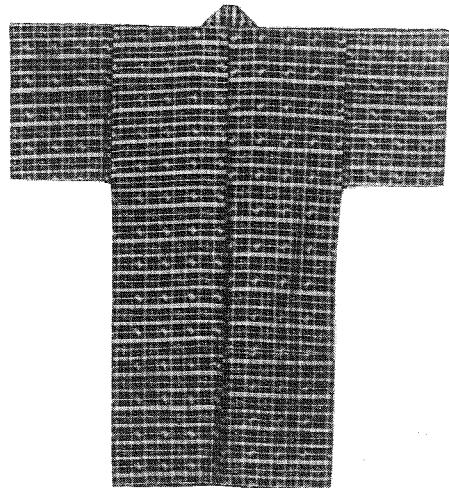
②白・赤・緑・赤白・赤・白

細い縞 黄

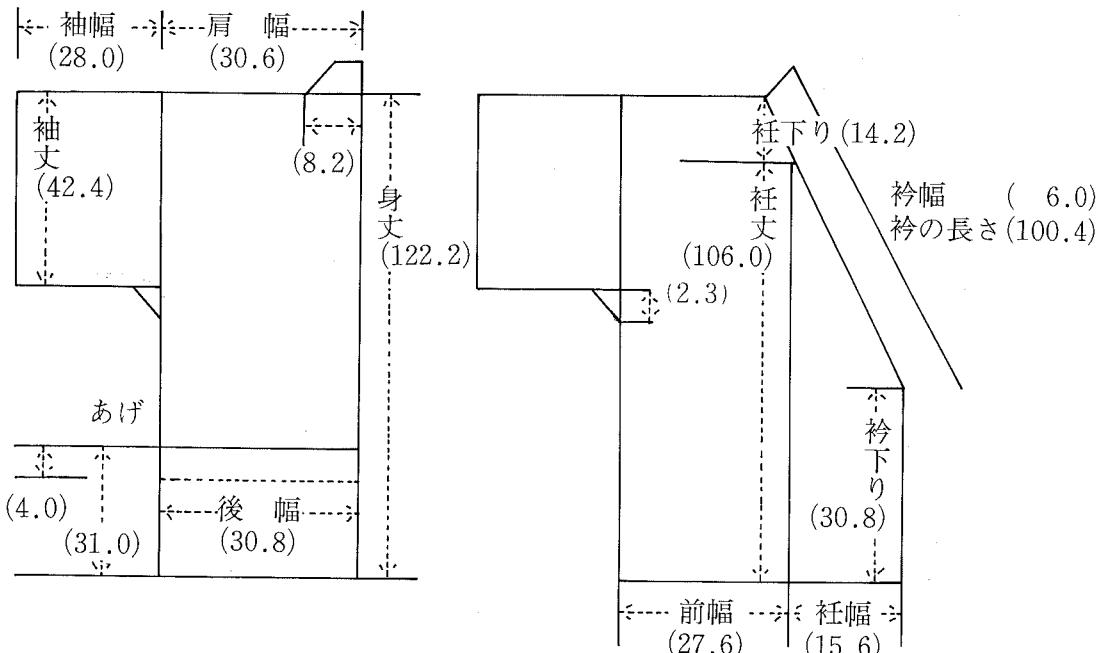
杼の数：七ヒヂチ

\*経糸がとても細く、20ヨミの糸が使われており、  
1 cm間に40本の糸が数えられる。

緯糸は木綿であるため、経糸の半分しか使われ  
ず、薄い布の印象は無い。模様は五玉で手縞の  
典型的な柄である。形態は琉装だが、仕立てを  
よくみると和装の技術で縫われた部分があり、  
製作年代はさほど古くはないと思われる。



#### 形態及び寸法



#### 4. 絹木綿浅地手縞衿着物（中柄）

素材：絹緯木綿 縞は絹緯絹

密度：絹30本×緯27本

染色：地色  
——経は茶（テカチ）

——緯は浅黄（藍）



紫と白のムーディ

絣——白と紺——化学染料

絣：柄名（ヤーヌカター・矢絣）

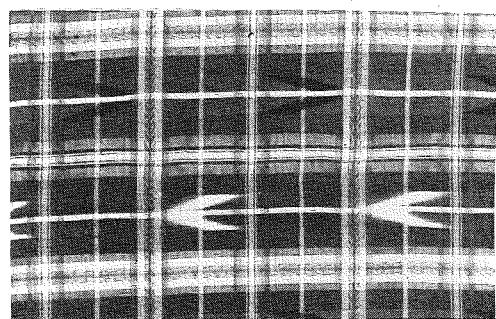
縞：太い縞

①紫・黄・ムーディ・緑・ムーディ・黄・  
紫

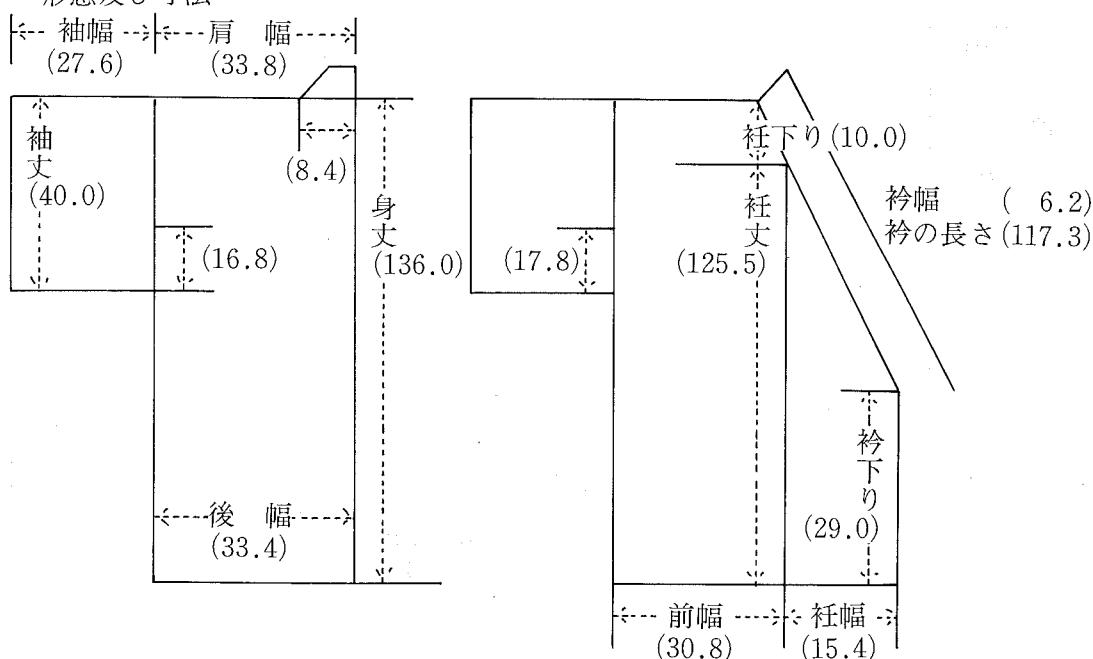
②緑・紫・地・黄・紫・黄・紫・黄・地  
細い縞——黄

杼の数：五ヒヂチ

\*衿仕立てで和服の形をとっている。化学染料が使われるなど製作年代は昭和初期と考えてよい。絣はヤーヌカターの変形で白と黒の二種類と、典型柄とは異なり、新模様である。四玉の中柄だが、絣柄が同じため細かく感じる。絏に使われている絹糸は良質でなく、また緯糸の浅黄の色も糸の中まで染み込んでいない。明治あたりの織りの技術と比較すると劣っていることが分かる。



#### 形態及び寸法



## 5. 木綿朱地手縞衿胴衣（中柄）

素材：経緯木綿

密度：経24本×緯16本

染色：地色 経は赤

緯は紺（藍）

縞 浅黄（藍）

黄（フクギ）

紅白のムーディ

緋—白

緋：柄名（ヌチヒチサギ二種）

手結式の緯縞（二）

縞：太い縞

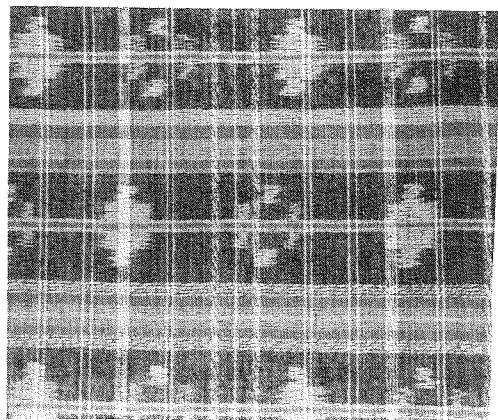
①黄・地・浅黄・白・地・白

②ムーディ・地・浅黄・白・浅黄・赤・  
 ムーディ

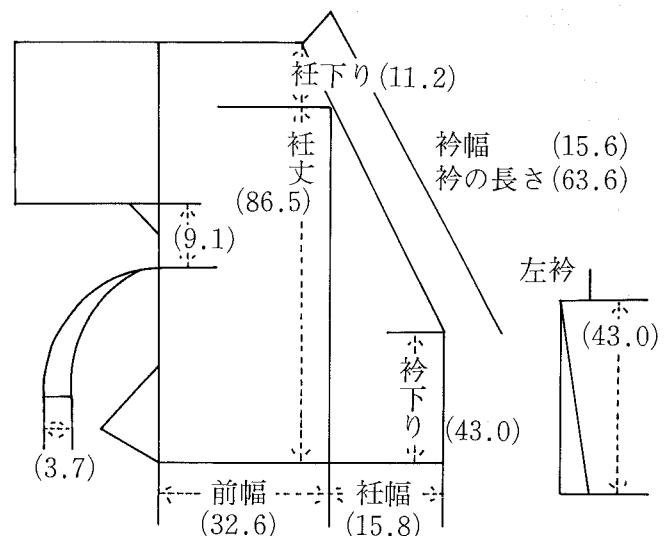
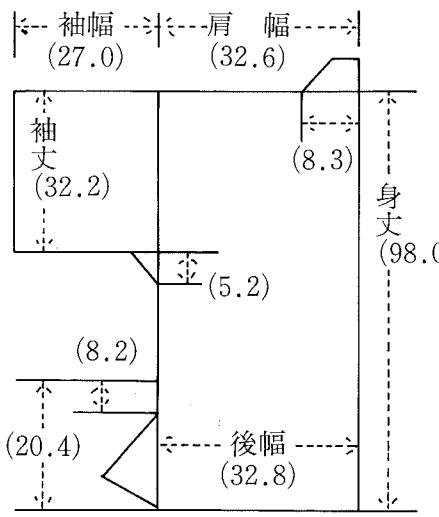
細い縞—白・赤・白

柄の数：七ヒヂチ

\*当館唯一の手縞柄の胴衣で、胴衣は上衣の下に  
 裙（カカン）と対をなして着用したものである。  
 太い縞①は偶数、縞柄が他のものと異なり、首  
 里縞というよりも那覇あたりで織られ柄に似て  
 いる。木綿の太い糸で、ざっくりと織られて  
 いる。紐は桃色地の紅型だが、裏はプリント柄の  
 木綿で、大正から昭和初期のものと考えられる。



### 形態及び寸法



## 6. 絹木綿紺地手縞衿上衣（大柄）

素材：絹絹 緯木綿 縞は絹緯どちらも絹  
密度：絹26本×緯20本

染色：地色—濃紺

縞—茶（テカチ）  
——緑（山桃に藍）  
——浅黄（藍）  
——からし色（山桃）

絢—白

絢：柄名（ヌチヒチサギー・チミヌカター）

手結式の緯絢（三）

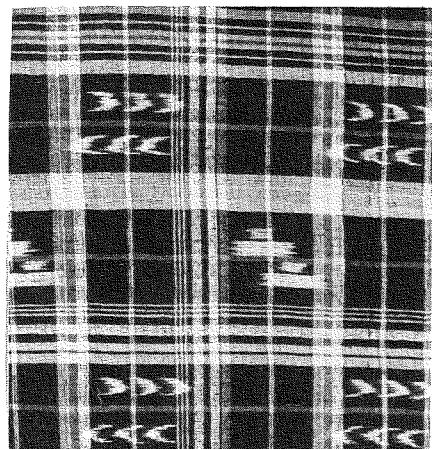
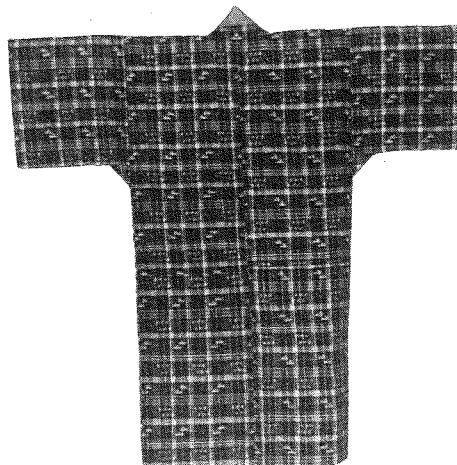
縞：太い縞

- ①緑・白・茶・白・からし
- ②緑・地・緑・地・緑・地・白・茶・白・  
地・からし・地・茶
- ③緑・地・からし・地・茶・浅黄・茶・  
地・からし・地・茶

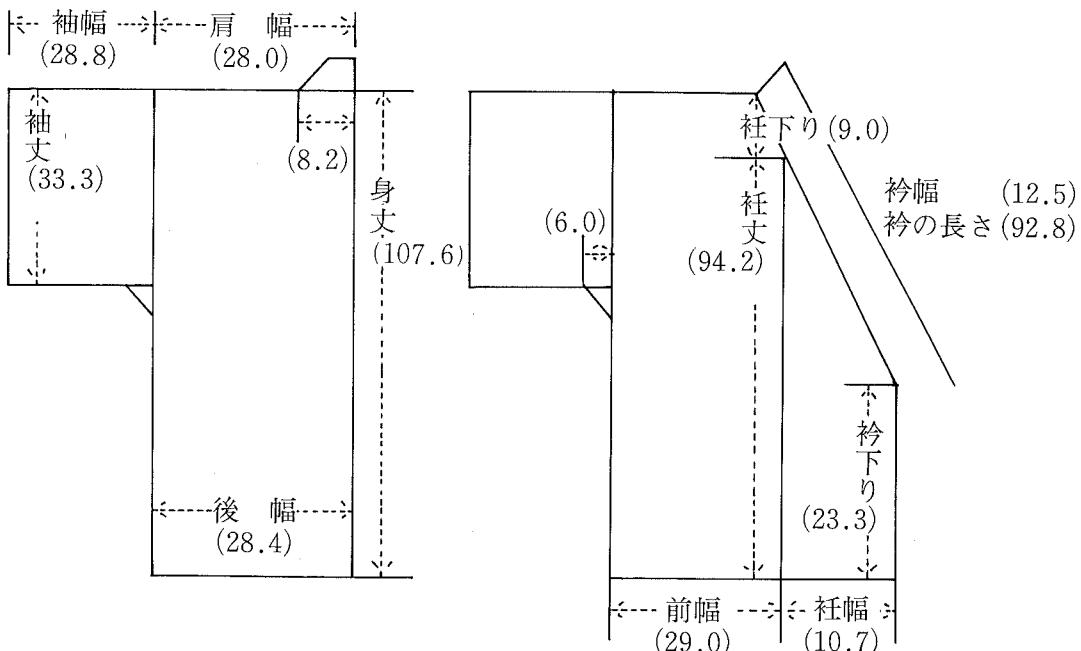
細い縞—浅黄

杼の数：八ヒヂチ

\*模様は二玉と大柄の中に入るが、同じ絢が一模様の中に二種三回出でくるために中柄に見える。太い縞が三種と他と異なっている。裏、衿は別布で、衿に仕立てられている。  
形態、仕立て共に琉装本来のもので、明治後期に首里で織られたものであろう。



### 形態及び寸法



## 7. 絹木綿紺地手縞衿上衣（中柄）

素材：絹緞 緯木綿 縞は絹緞どちらも絹

密度：絹28本×緯20本

染色：地色—濃紺（藍）

- 縞——赤（フクギに蘇枋）
- 緑（フクギに藍）
- 黄（フクギ）
- 紅白のムーディ

絣——白

辯：柄名（カギジャー・ヌチヒチサギー）

手結式の緯絣（二）

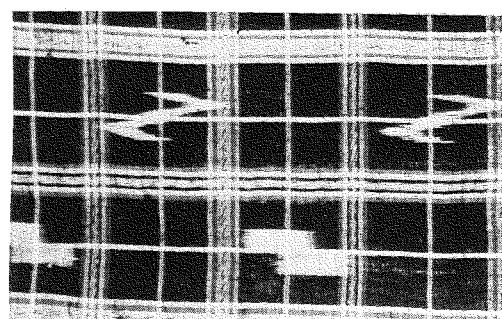
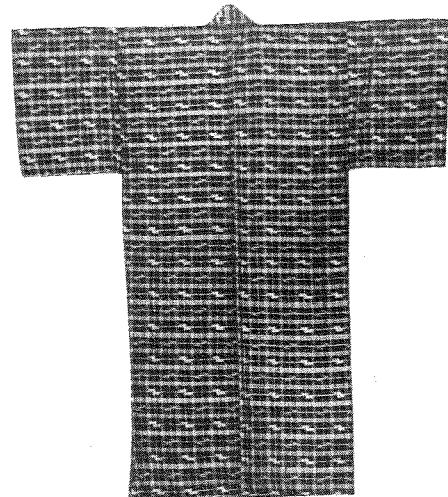
縞：太い縞

- ①白・赤・黄・ムーディ・黄・赤・白
- ②赤・白・地・ムーディ・白・ムーディ・  
地・白・赤

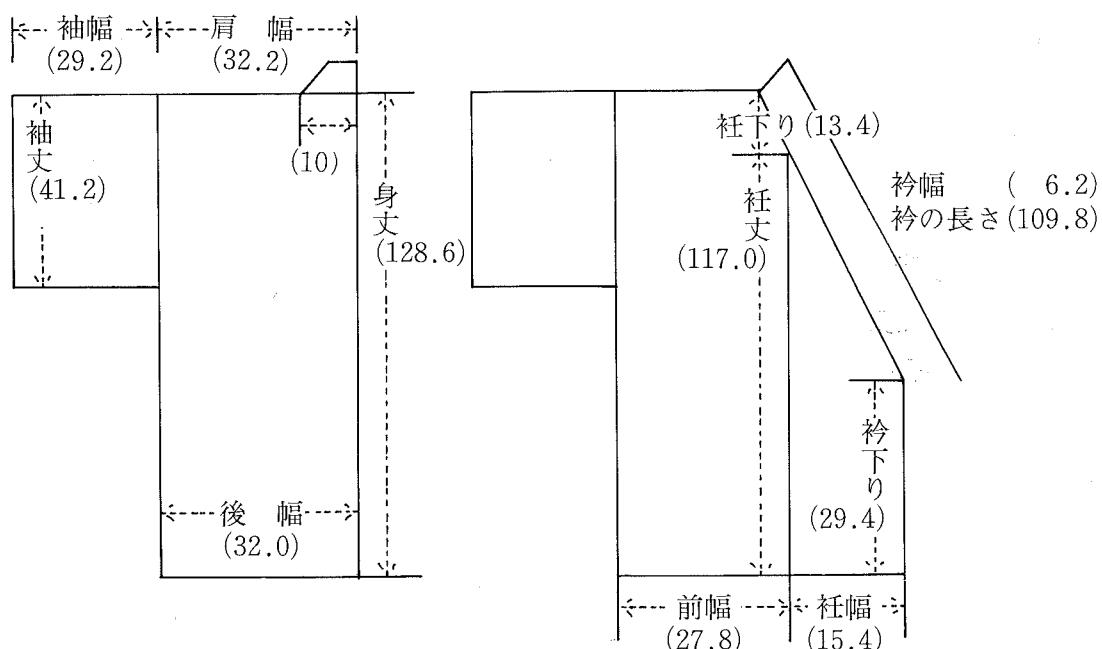
細い縞—黄

杼の数：七ヒヂチ

\* 給仕立てで、裏には赤い木綿布（背）、青い木綿布（袖口）が使われ、中には綿が入っている。形態は琉装だが、古い琉装の縫いかたにのっとっていない部分がある。明治後期から大正にかけて首里で織られたと考えられる。模様は四玉で典型的な手縞柄といえる。



### 形態及び寸法



## 8. 絹木綿浅地手縞上衣（中柄）

素材：絹絹 緯木綿 縞は絹緯どちらも絹

密度：絹32本×緯26本

染色：地色 絹は赤茶（テカチ）

緯は浅黄（藍）

縞 赤茶（テカチ）

緑（フクギに藍）

からし色（山桃にテカチ）

赤茶と白のムーディ

絣 濃紺（フクギに藍）

縫 柄名（ヌチヒチサギー）

手結式縫（→）

縞 太い縞

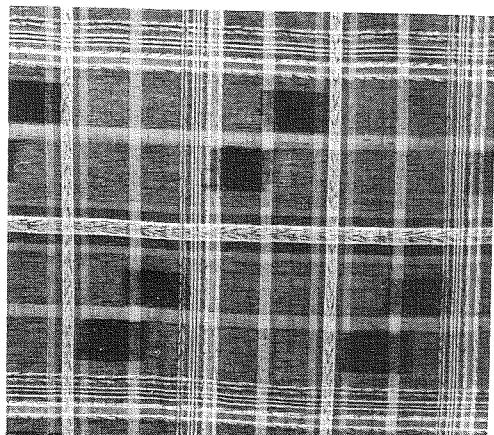
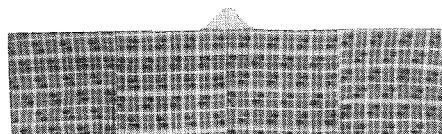
①ムーディ・赤茶・ムーディ・地・白・赤  
茶・白・赤茶・白・地・ムーディ・緑・  
ムーディ

②からし・赤茶・白・ムーディ・白・赤  
茶・からし

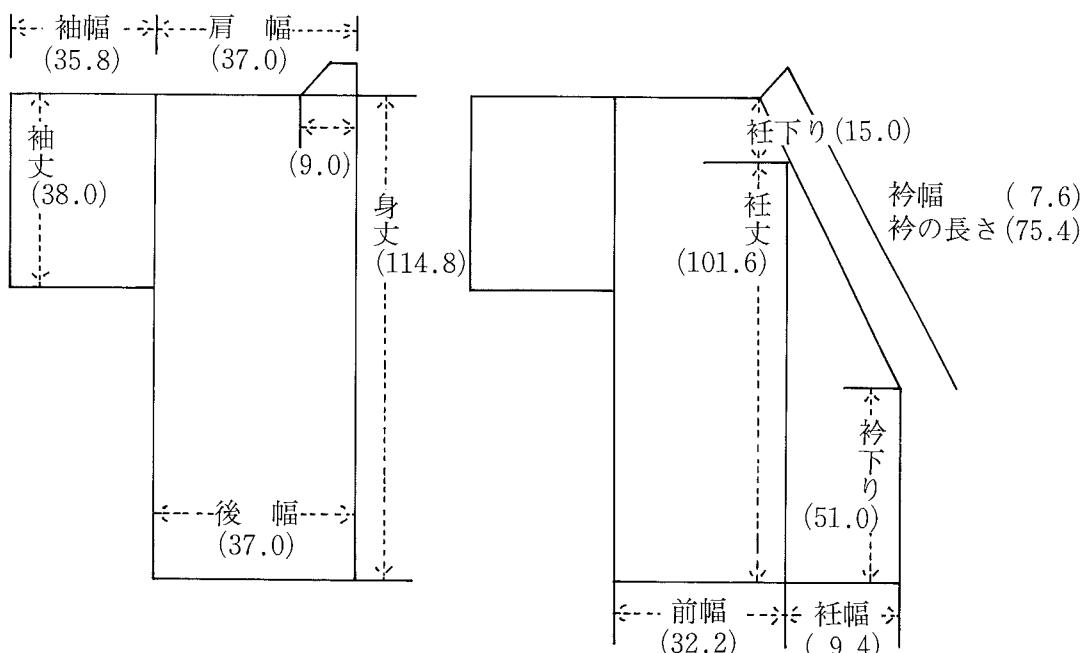
細い縞一からし

杼の数：七ヒヂチ

\*模様は四玉と中柄のなかでも大きく感じるのは  
縞が一種類であるのと、身丈が他の物より短い  
ことによる。衿は別布だが後で、仕立て直した  
物である。縞に使われている赤茶とからしの色  
には渋味があり複雑で太い縞柄を押さえる役目  
をしている。



### 形態及び寸法



## 9. 絹茶地手縞上衣（小柄）

素材：経緯手紡ぎの絹（モロツムギ）

密度：絏24本×緯23本

染色：地色—焦茶（グールに泥染）

縞—赤茶（クルボウ）

—黄（クルボウ）

—浅黄（クルボウに藍）

絣—白

縒：柄名（ヌチヒチサギー）

手結式の緯縒（—）

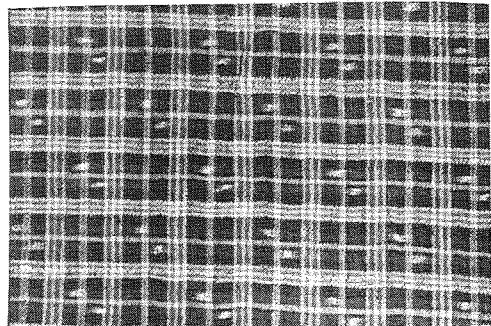
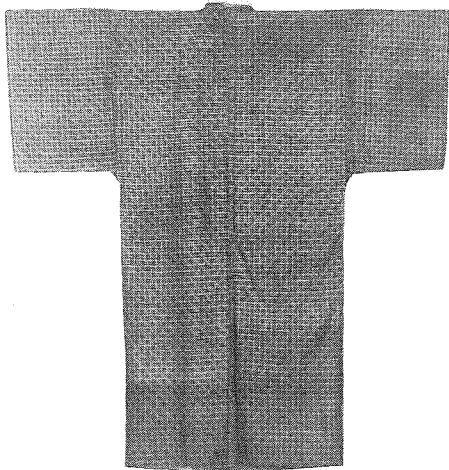
縞：太い縞

①黄・赤茶・黄・赤茶・黄

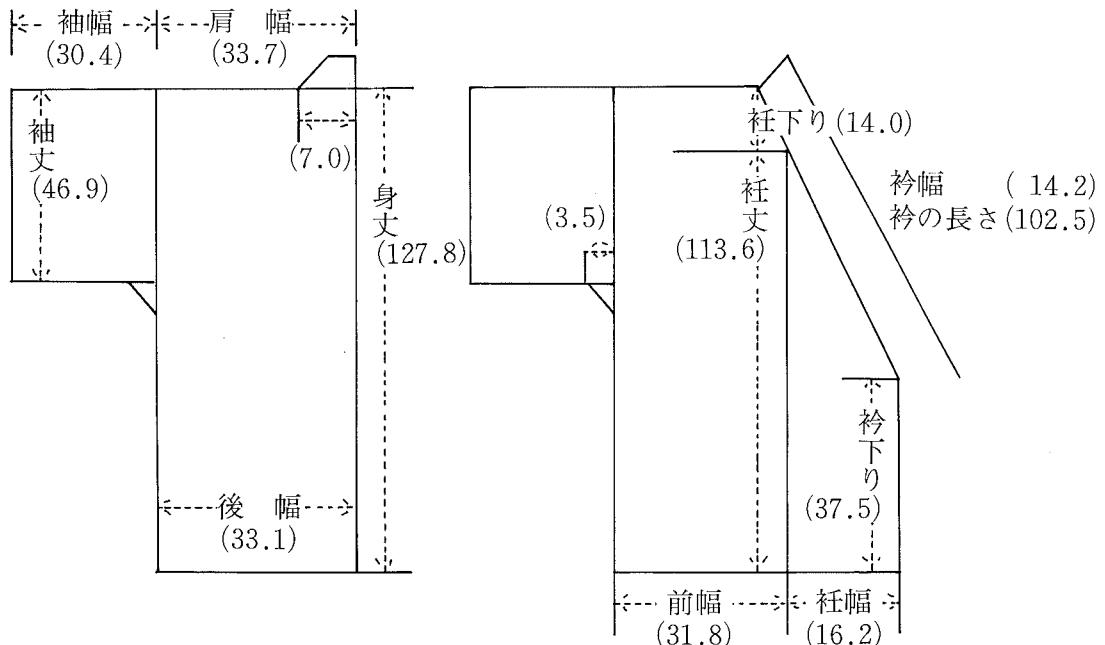
細い縞—浅黄

杼の数：五ヒヂチ

\*背中、衿下あたりの部分に痛みがある。泥染めの鉄分によって、糸が切れたのであろう。模様は十二玉と小柄だが貢納され王家の衣裳として着用されたと考えられる。裏は濃紺、衿は明るい黄で、形態、仕立ては疏装のものである。色使いだけをみると非常に派手だが柄が細いため落ち着いた感じをうける。太い縞も絣も一種だが、手縞の分類に組み込むことにした。明治中期以前、久米島で織られた物であろう。



### 形態及び寸法



## 10. 木綿浅地手縞袷上衣（大柄）

素材：経緯木綿

密度：経24本×緯20本

染色：地色—浅黄（藍）

縞——濃紺（藍）

——紺白のムーディ（左右に二種）

絢——白

縫：柄名（ヌチヒチサギー・ミジグム）

手結式の緯縫（二）

縞：太い縞

①紺・ムーディ・紺・地・白・地・白・

地・白・地・紺・ムーディ・紺

②紺・ムーディ・地・紺・浅・紺・浅・

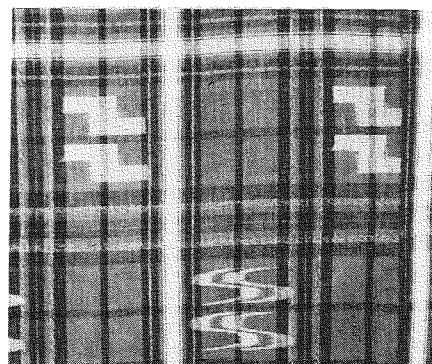
ムーディ・紺

細い縞——紺

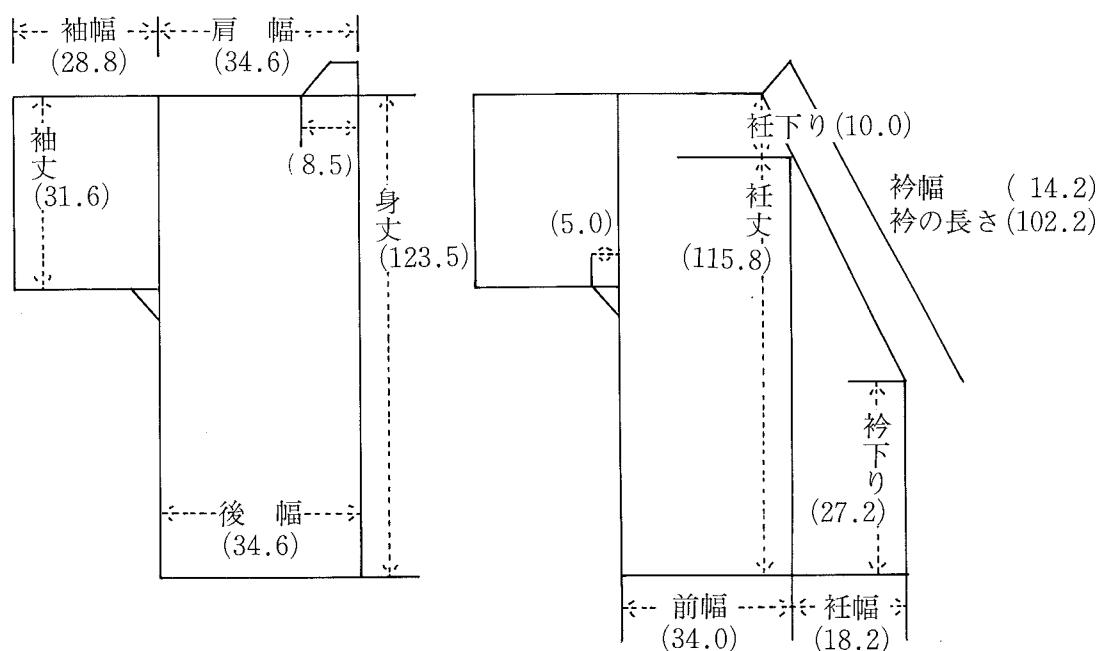
杼の数：七ヒヂチ

\*紺白のムーディのはいった手縞はめずらしく、

本品は当館唯一のものである。模様も二玉と大柄なところから王家や接司階級が着用した可能性もある。藍の濃淡だけで染めが行われているが、かえって白い絢を際立たせている。衿は藍染の経縞布、裏は深浅黄色の木綿である。形態、仕立て共に疏装本来のもので、明治中期以前に首里で織られたと思われる。



### 形態及び寸法



## 11. 絹木綿浅地黒縞手縞衿上衣（中柄）

素材：絹絹 緯木綿 縞は絹緯どちらも絹

密度：経30本×緯28本

染色：地色 経は赤（フクギに蘇枋）

緯は浅黄（藍）

縞 赤（フクギに蘇枋）

緑（フクギに藍）

黄（フクギ）

紅白のムーディ（左右二種）

絹 濃紺（フクギに藍）

縫：柄名（カギジャー・ヌチヒチサギー）

手結式の縞縫（二）

縞 太い縞

①緑・赤・黄・ムーディ・黄

②ムーディ・黄・緑・赤・黄・赤・緑・

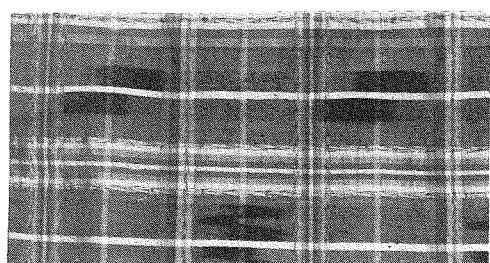
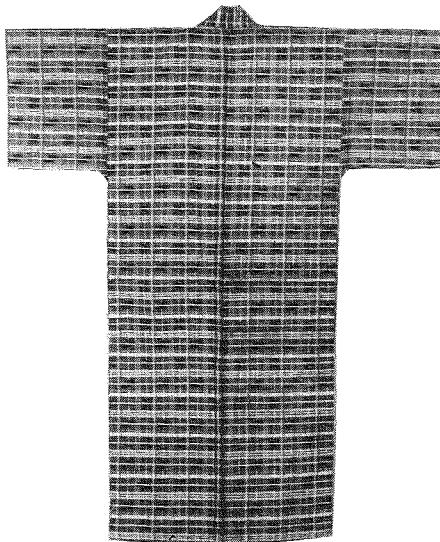
黄・ムーディ

細い縞一経浅黄 緯黄

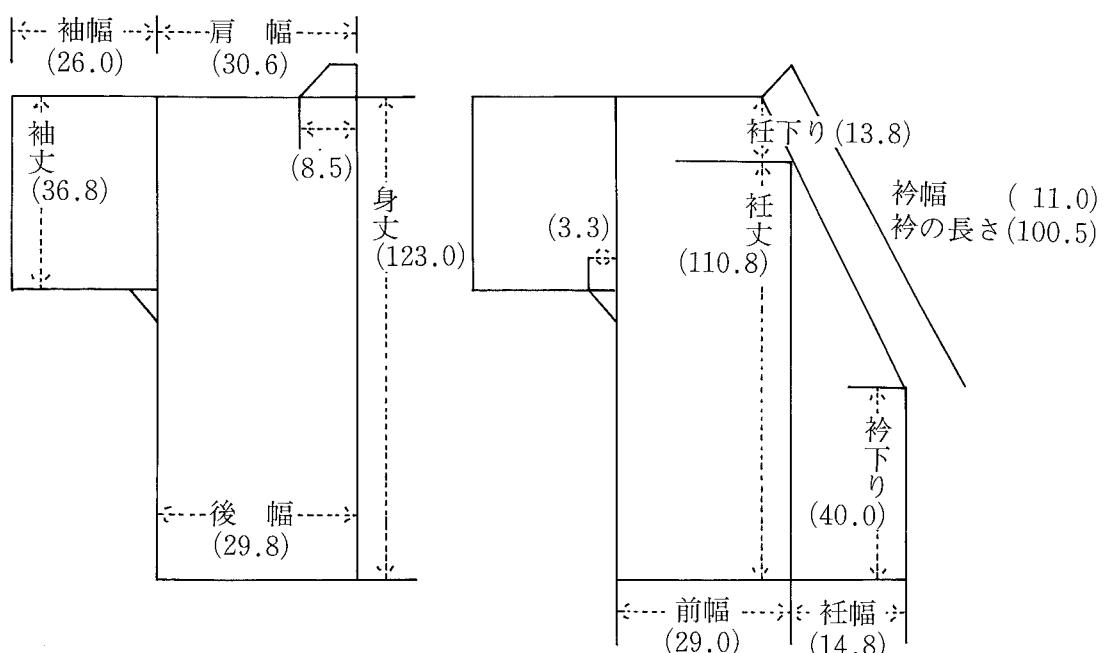
杼の数：八ビヂチ

\*形態、仕立て方は本来の琉装で、衿の裏は赤い木綿の布である。図柄の大きさは四玉で下級士族の衣裳として、明治中期以前に首里で織られたものと考えられる。

地は赤と浅黄の交織りだが、木綿の糸が絹糸に比べ太いので、浅黄の色がはっきり出て違和感はない。



### 形態及び寸法



## 12. 絹灰色地手縞袷上衣（小柄）

素材：絹緯手紡ぎの絹（モロツムギ）

密度：絹30本×緯26本

染色：地色—灰色（ユウナ）

縞——金茶（クルボウ）

——黄（クルボウ）

絢——白

縒：柄名（ヌチヒチサギー）

手結式の緯絣（—）

縞：太い縞

①黄・金茶・黄・金茶・黄

細い縞——白

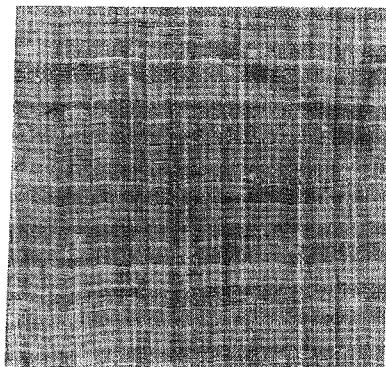
杼の数：五ヒヂチ

\*久米島では王府時代、紬を貢納しており、この布もそうではないかと思う。縒は一種で縞にはムーディもないが、手縞の範疇に入れてもよいと考える。御絵図には手縞の柄もあり首里だけでなく久米島でも織られたと思ってよいのではなかろうか。

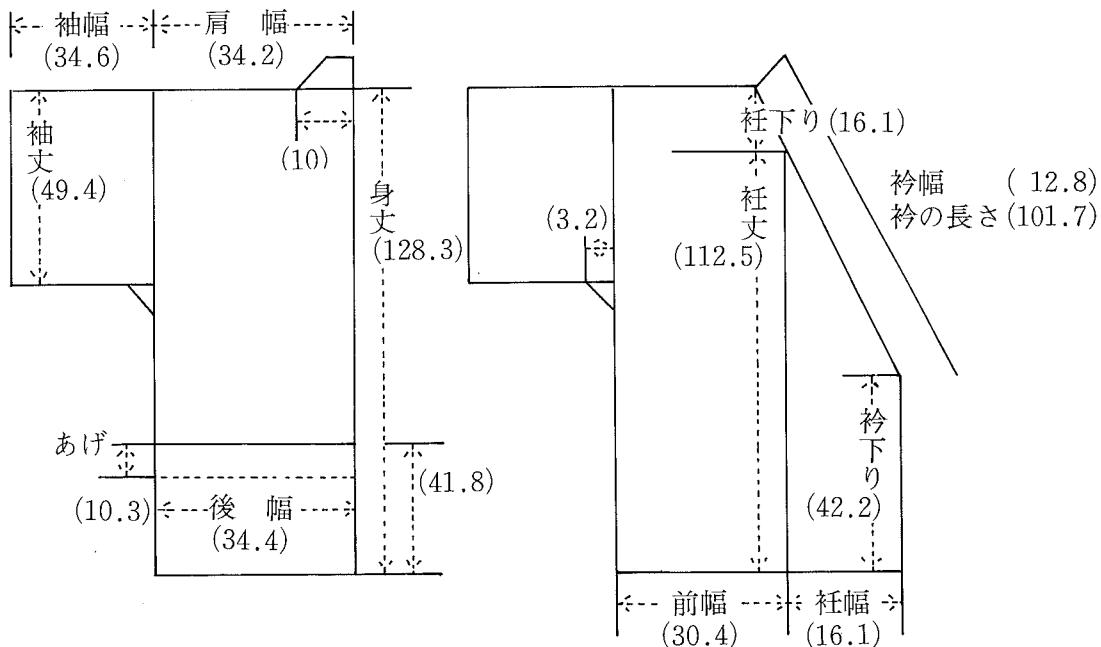
布は地色の部分にだいぶ痛みがある。解かれた状態になっていたのを昭和53年、別裏をつけて琉装の上衣に仕立て直している。

模様の大きさは17玉と小柄である。

灰色の染色は、ユウナのアクと大豆をすりつぶしたものをおいっしょに水に溶解させ、発酵させたもので行なっている。



### 形態及び寸法



### 13. 木綿混色地手縞衿上衣（中柄）

素材：経木綿 緯木綿

密度：経22本×緯20本

染色：地色——経は茶（テカチ）

緯は濃紺（藍）

縞——茶（テカチ）

緑（フクギに藍）

黄（フクギ）

茶と白のムーディ

絢——白

絢：柄名（カギジャヤ・ヌチヒチサギー）

手結式の緯絢

縞：太い縞

①白・緑・白・茶・黄

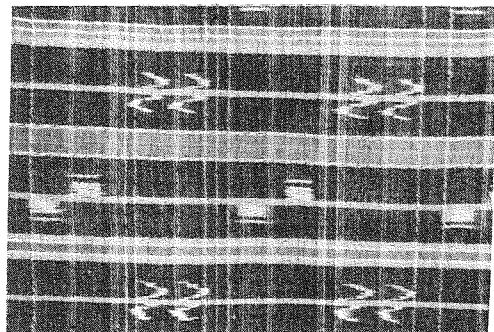
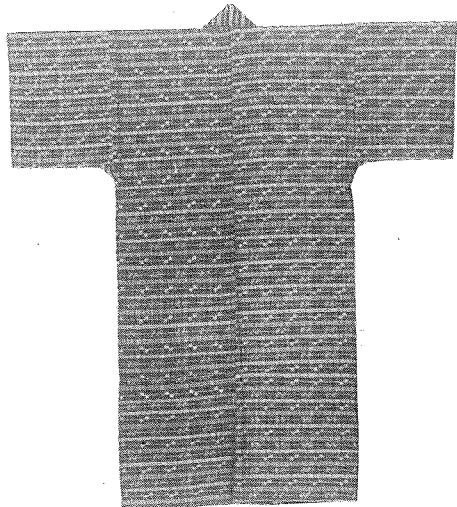
②ムーディ・緑・茶・緑・ムーディ

③黄・白・緑・白・黄

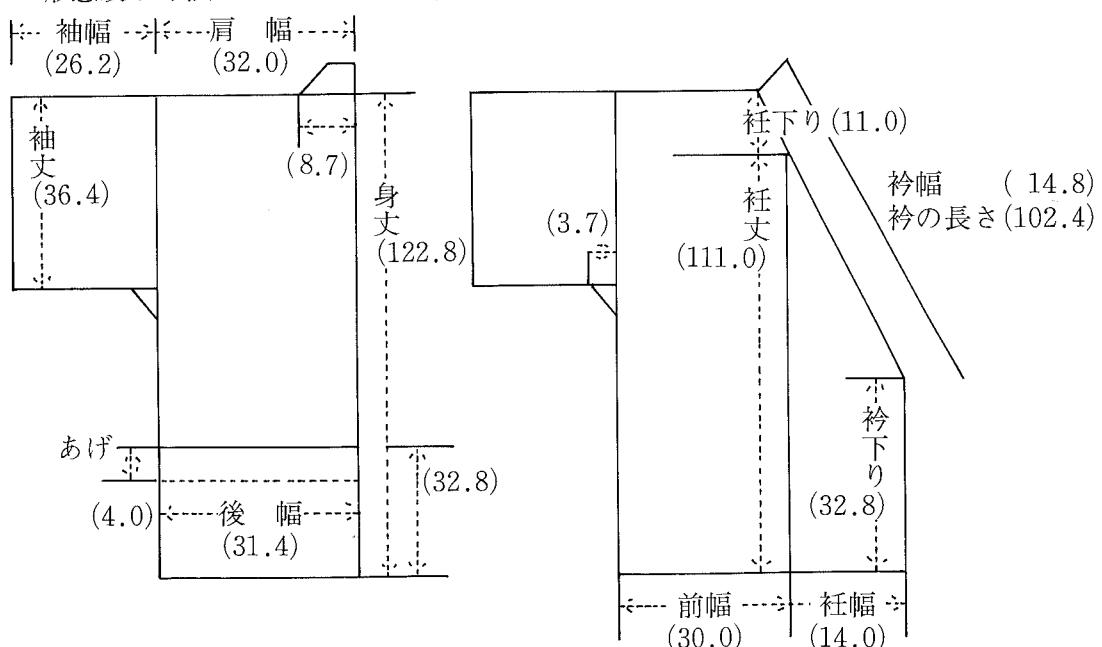
細い縞一黄

杼の数：七ヒヂチ

\*経緯に木綿で、織りの密度をみると経緯ほぼ同数であるため、地の茶と絢の色の差がはっきり分かる。糸が太く簇は11ヨミの荒い物が使われているが、布の仕上がりは粗雑でない。裏に、木綿紅型布、木綿茶地格子布が使われている。形態は琉装で明治中期以前、首里で製作されたものであろう。柄は太い縞が三種で、大きさは五玉である。



#### 形態及び寸法



## 14. 絹木綿紺地手縞衿上衣（中柄）

素材：絹 緯木綿 縞は絹緯どちらも絹

密度：絹28本×緯22本

染色：地色—濃紺（藍）

縞  
赤（フクギに蘇枋）  
浅黄（藍）  
黄（フクギ）  
紅白のムーディ

絣—白

絣：柄名（カギジャー・ヌチヒチサギー）

手結式の緯絣（二）

縞：太い縞

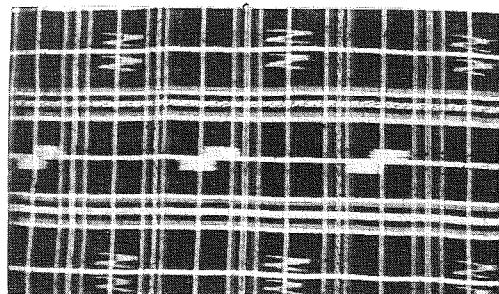
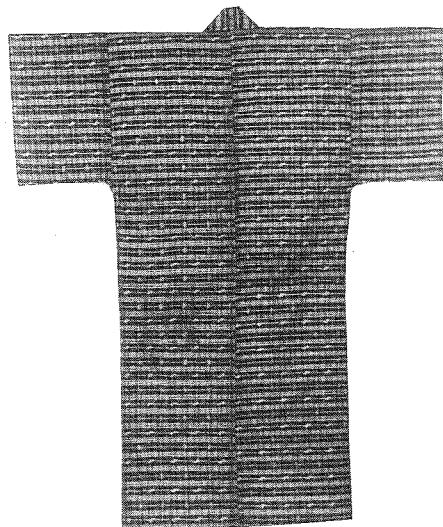
①白・赤・地・ムーディ・地・白・赤

②白・赤・地・白・赤・白

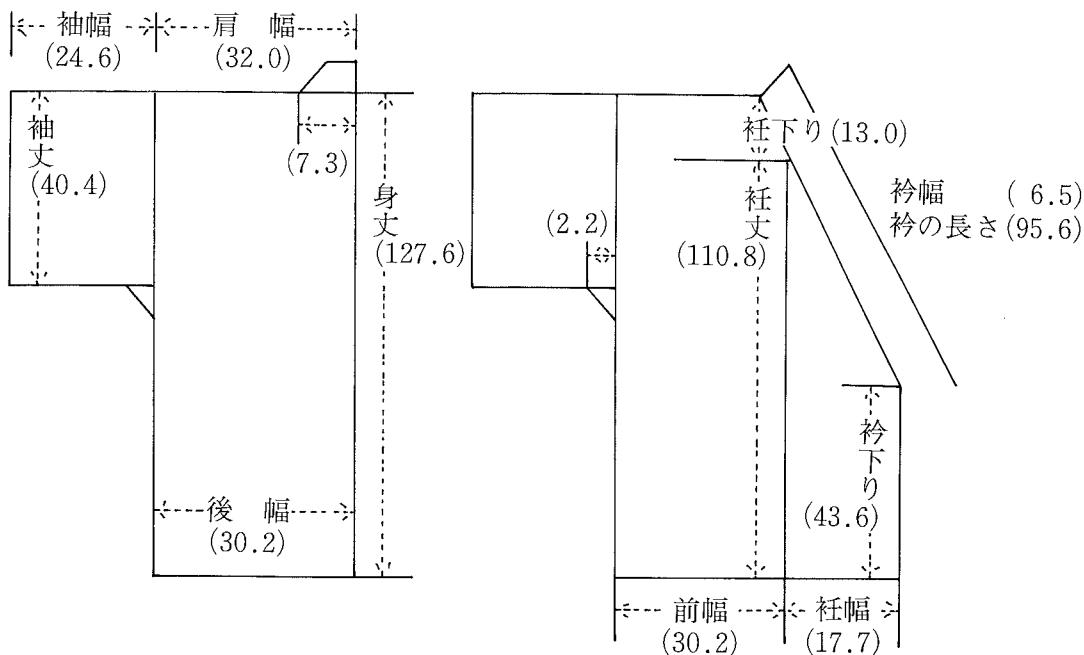
細い縞—黄

杼の数：七ヒヂチ

\*図柄は六玉と中柄模様のなかでも細かいほうである。太い縞②は偶数になっており、他のものと異なっている。形態は琉装であるが、返し衿に仕立てられていないことや染色の状態からみて、大正時代あたりのものかと考えられる。裏には赤い木綿が使われ、脇にはあげが入っている。縞の赤い色が白い糸にじみ出ている部分がある。



### 形態及び寸法



## 15. 絹木綿紺地手縞上衣（中柄）

素材：絹絹 緯木綿 縞は絹緯どちらも絹

密度：絹36本×緯20本

染色：地色 絹は赤（フクギに蘇枋）

緯は濃紺（藍）

縞 赤（フクギに蘇枋）

緑（フクギに藍）

黄（フクギ）

紅白のムーディ

絢 白

縒 柄名（カギジヤー・ヌチヒチサギー）

手結式の緯縒（二）

縞 太い縞

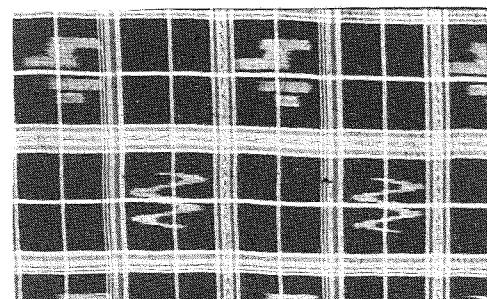
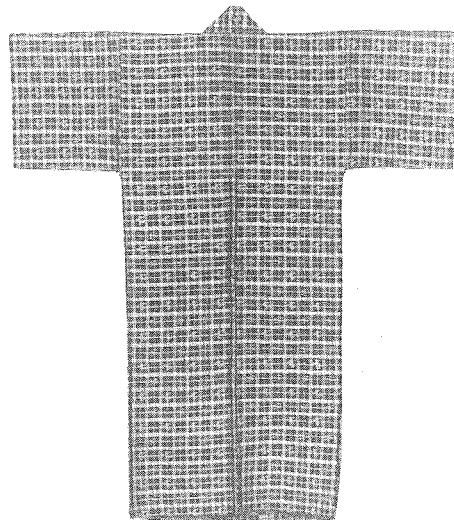
①黄・赤・緑・ムーディ・緑・赤・黄

②黄・赤・緑・赤・白・赤・白

細い縞 黄

杼の数：八ヒヂチ

\*形態は琉装だが、仕立てをみると和装の技術で縫われている部分がある。布に痛みがあり、経糸が切れた所がある。裾や衿に解いた跡があり、衿を縫う途中と思われる。色柄共に手縞の典型といえる。製作時期はそれほど古くなく、明治後期に首里で織られたものであろう。地は絹赤、緯紺の交織で、図柄の大きさは五玉である。



### 形態及び寸法

